

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

The relationships between the meanings of the transitive verb CHANGE
and the forms of its object

日 木 満

1. はじめに

以下の日本語文はすべてなんらかの変化を伴う文である。

- [1] 運転手は突然レーンを変えた。(車線変更)
- [2] 運転手は突然スピードを変えた。
- [3] 彼は考えを変えた。
- [4] カメレオンは必要なときに色を変えることができる。(変色)
- [5] 彼女が部屋に入ってきたとき、彼は話題を変えた。(変更)
- [6] 彼は去年仕事を変えた。(転職)
- [7] 満塁になったところで、監督はピッチャーを代えた。(交代)
- [8] 彼はギターの弦を替えた。(交換)

これらの文を他動詞CHANGEを用いて英語で表現しようをすると、それぞれの目的語は以下に示すように、限定詞と複数語尾-sの使用の点で、かなり異なる制約を見せる¹。(＊は不適格性を示す。)

- [1'] The driver **changed** ∅ lanes/*∅ lane/*a lane/*his lane/*the lane abruptly.
- [2'] The driver **changed** ∅ speed/∅ speeds/his speed/*a speed abruptly.
- [3'] He **changed** his mind/*∅ mind/*a mind/*∅ minds/*the mind.
- [4'] A chameleon can **change** ∅ color/∅ colors/its color/*its colors, when it needs to.
- [5'] When she entered the room, he **changed** the subject/∅ subjects/*∅ subject/*a subject/*his subject.
- [6'] He **changed** jobs/his job/*∅ job/*a job/*the job last year.
- [7'] After the bases were loaded, the manager **changed** ∅ pitchers/the pitcher/*∅ pitcher/*a pitcher.
- [8'] He **changed** a guitar string/the guitar string/∅ guitar strings/the guitar strings/*∅ guitar string.

目的語の可能性を見比べると、さまざまな制約の違いが見えてくる。例えば、[∅ Ns]はほとんどの場合可能だが、[3']では不可能になっている。逆に、[∅ N]はほとんどの場合不可能だが、[2'] [4']では可能となっている。同様に[a N]もほとんどの場合不可能だが、[8']では可能となっている。また、可能な目的語の種類からみても、[1']や[3']のように1種類しか許さない場合があるかと思えば、[5'] [6'] [7']のように2種類を許すものもある。しかも、1種類しか許さない[1']と[3']

では、前者が[\emptyset Ns]、後者が[one's N]と、それぞれ異なるものを要求している。2種類が可能な場合でも[5][7]では[\emptyset Ns]と[the N]の組み合わせ、[6]では[\emptyset Ns]と[one's N]の組み合わせ、というように異なっている。さらに、中には[8]のように4つもの形が可能なものもある。

目的語の形の問題から少し離れるが、[7]について付言すると、[7]で話題になっているピッチャーが野茂という名前のピッチャーである場合、日本語では「満塁になったところで、監督は野茂を代えた」ということは十分可能であるが、英語では[9]に示すように、目的語をNomoにしてしまうと、もはや他動詞CHANGEの使用そのものが不可となるという制約があり、例えば[10]のように“take 人 out”という表現を用いなければならなくなる。

[9] *After the bases were loaded, the manager **changed** Nomo.

[10] After the bases were loaded, the manager **took** Nomo/the pitcher/* \emptyset pitchers out.

これらのさまざまな制約は一体どこからくるのか。本稿ではこの疑問解明に向けて、他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係を模索してみたい。

本稿では、以下、ことわりがない限りCHANGEはその他動詞用法を指すことにし、目的語は、CHANGEの目的語のことを意味する。さらに、目的語の形は、名詞の原形(Nで表記)と、定冠詞the、不定冠詞a/an、無冠詞 \emptyset 、代名詞の所有格one's、ならびに複数形語尾-sの組み合わせによって考えられる [\emptyset N] (e.g., \emptyset speed), [a N] (e.g., a speed), [the N] (e.g., the speed), [\emptyset Ns] (e.g., \emptyset speeds), [one's N] (e.g., his speed), [the Ns] (e.g., the speeds), [one's Ns] (e.g., his speeds)の7つの形式を指すこととする。

また、以下では名詞を大文字で表記する必要があるが、その場合は、数ならびに限定詞について中立的な状態の名詞(辞書の見出し語と同じレベル)を指すことにする。

以下、先行研究でどのような制約がすでに指摘されているかを見てみる。

2. 先行研究

残念ながら、筆者の限られた調査の範囲では、CHANGEに限らず、動詞の目的語の形を主な研究対象とする研究論文を探すことはできなかった。

文法書や語法書を参照しても、CHANGEを含む文の受身形の可能性などの文法上の制約についての記述はあったものの、目的語の形の制約についての記述を見出すことはできなかった(Quirk et al. 1985, Declerck 1991, 他)。

そこで、筆者は専ら辞書のCHANGEの他動詞用法の部分参照することにした。

以下では、辞書の中でどのような情報が提供されているかを考察するために、まず『ジーニアス英和辞典』(以下、『ジーニアス』)を例にとり、概略を見たうえで、他の辞書も含めて、総括的にどのような制約がすでに指摘されているか、また、どのような問題が存在するのか、を検討する。

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

『ジーニアス』のCHANGEの他動詞用法の記述は以下のようなものである。(下線は目的語の形についての記述部分を強調するために筆者が追加した。)

『ジーニアス』
change
【動】 他
1 [D] [SVO] <人が> <物・事> を変える, 変更する, 改める; [D][S] [SVO1 into [to] O2] <人・事が> O1 <人・物・事> をO2 <人・物・事> に変える, 変えてしまう (cf.→shift 他 3 [語法])
~ one's plan [job] 計画[仕事]を変更する 《◆alter one's planは計画の一部を変更すること》 /
She ~d her hairdresser. 彼女は行きつけの美容院を変えた /
~ one's feeling for him 彼に対する自分の気持を変える /
a prince ~d into a frog カエルになった王子.
2 [D] [SVO 1 for O2] <人が> O1 <物> とO2 <物> を取り替える (substitute); [SVO1 (with O2)] <人が> (O2 <人> との間で)O1 <物> を交換する 《◆O1は複数名詞》
~ one dress for another 服を別の服と交換する /
~ the oil in one's car 車のオイルを替える /
~ the sheets (ベッドの)シーツを変える 《◆~ a bedともいう》 /
~ one's dress 服を着替える[改める] 《◆alter one's dressは服を手直しする》 /
~ one's books (図書館で)別の本を借りる /
~ planes [trains, buses] 飛行機[列車, バス]を乗り換える 《◆×~ one's planeなど目的語に単数形は不可》 /
~ seats [cars] with him 彼と席[車]を交換する 《◆~ one's seatは「別の席に座る」》 /
~ sides in an argument 議論で立場を変える.
3 <お金> を [...と] 両替する; ...を [...に] くずす (break) [for, into, to]
~ one's dollars for [into] pounds ドルをポンドに替える /
Can you ~ this bill (into ten dimes) for me? この1ドル紙幣を(10セント硬貨10枚に)くずしていませんか 《◆Can you ~ me this ...? のようにもいえる》.
4 <子供・赤ん坊> を着替えさせる
~ a baby 赤ん坊のおむつを替える.
5 <車のギア> を換える
~ [《米》 shift] gear(s) 変速する; 話し方 [やり方] を変える.

他動詞CHANGEの目的語の形についての明示的な情報を探してみると、語義2と語義5の部分に見出すことができる。まず、語義2の《◆O1は複数名詞》という注意書きである²。この注は[SVO1 (with O2)]への言及と解釈するのが妥当に思われる。そうだとすると、複数名詞でなければならないとされるO1は、交換する物を指す目的語ということになる。その例と考えられる

のが、～ planes [trains, buses]/ ～ seats [cars] with him/ ～ sides in an argumentである(“～”はchangeの代用)。～ planesには、さらに注がついていて、《◆×～ one’s planeなど目的語に単数形は不可》の説明があることから、飛行機などの乗り物を乗り換えるという意味の場合には、目的語(乗り物を指す名詞)を複数形にしなければならないということ、そして、代名詞所有格つき単数の[one’s N]は不可であることがわかり、有益な情報といえる³。さらに、～ seats [cars] with himの用例には《◆～ one’s seatは「別の席に座る」》という補足説明がある。つまり、目的語の形が[ø Ns]の場合(e.g., I changed seats with him.)は「私は彼と席を交換した」の意味になるのに対し、目的語の形が[one’s N]の場合(e.g., I changed my seat.)は「私は別の席に座った」という意味になる、という説明である。この説明は、“CHANGE + SEAT”の組み合わせにおいて、[ø Ns]と[one’s N]の2つの形を使うことが可能になることを示すと同時に、違う形を使うことによって生まれるニュアンスの違いをも説明しているという点で貴重な情報であると考えられる。

しかし、語義2の情報から疑問も生じてくる。まず、交換する物を指す場合に[ø Ns]になるといふならば、例文の2番目のchange the oil in one’s car「車のオイルを替える」では、なぜ[ø Ns]が使われていないのか。これは、交換する物を指す場合であっても、必ずしも[ø Ns]になるとは限らないと理解すべき情報なのだろうか。[the N]はオイル交換以外のときでも可能なのか。さらに、目的語がPLANEの場合は[one’s N]が不可であるのに、SEATになるとなぜ可能になるのか⁴。

これらの点について、他の辞書を参照すると『レクシス英和辞典』(以下、『レクシス』)と『ウィズダム英和辞典』(以下、『ウィズダム』)では次のような記述をみることができる。(下線は目的語の形についての記述部分を強調するために筆者が追加した。)

『レクシス』

- 2 (複数の同種のものの中で別のものへ) …を替える, 変える; …を乗り換える; …を<人と>交換する
 <with> (目的語は複数形)
 Let’s ~ seats. 席を交換しましょう
 Can I ~ places with you? = Can we ~ places? 場所を替っていただけますか
 You must ~ trains [×the train] at the next stop to go to Wimbledon. ウィンブルドンへ行くには次の駅で乗り換えなくてはなりません
 ~ jobs 職を変える (change one’s jobなら単数形)
 ~ schools 転校する

『ウィズダム』

- 3a <物・事・人>を変える, 交換する: 服などを着替える: 乗物を乗り換える (同種のもを交換するときはしばしば目的語を複数形にする)
 change trains [buses] at Shinjuku 新宿で列車[バス]を乗り換える
 Go home and change your clothes [(主に英) get changed]. 家で服を着替えてきなさい
 change a flat tire パンクしたタイヤを換える

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

ここから2つの考察が可能である。まず、『レクシス』は、『ジーニアス』同様、この語義では目的語は複数形と明記しているが⁵、『ウィズダム』では、「しばしば目的語を複数形に」（傍点筆者）となっている。事実『ウィズダム』の例文では「タイヤを換える」という意味で[a N]の例が挙げられていて、この語義であっても、必ずしも複数形になるわけではないことを示している⁶。

（しかし、タイヤの例でも、ここで複数形[ø Ns]が不可能かどうか、また、もし可能だとすれば、例示されている[a N]とのニュアンスの違いは何か、はこれだけの記述からは不明である。）当然ここで疑問になるのは、しばしばの意味である。どういうときに複数形になり、どういうときに複数形にならないのか。さらなる情報を求めて、英英辞書も含めて他の辞書を参照してみたが、有益と思われる情報は得られなかった。

逆に、Swan (1994:356)の以下の問題提起にはさらに困惑を深める結果となった。

change + plural

You can *change trains, change jobs, or change horses*, but you probably wouldn't talk about *changing shirts or changing cassettes*. Why?

Swanによれば、汽車や馬の乗り換えや、転職の場合にはCHANGEの目的語は[ø Ns]となるが、シャツを着替えたり、カセットを入れ換える場合にはおそらく[ø Ns]を使っては表現しないのではないかと、ということのようである。では、シャツの着替えやカセットの入れ替えのときには、SHIRTやCASSETTがどの形になるのかが知りたいところだが、残念ながらその情報はここでは提供されていない。

考察の2点目はこの語義での他の形の可能性についてである。『レクシス』ではこの点について次の2つの補足説明を加えている。(1) 乗り換えの意味においては、[the N]が不適格である (i.e., You must change trains [×the train] at the next stop to go to Wimbledon.)。(2) “CHANGE + JOB”の組み合わせでは、[ø Ns]と[one's N]の両方が可能である (i.e., change jobs 職を変える (change one's jobなら単数形))。どちらも有益な情報であるが、たとえば、“CHANGE + JOB”の組み合わせでも、『ジーニアス』のSEATの説明にあったような[ø Ns]と[one's N]の違いによる意味・ニュアンスの差があるのか、“CHANGE + TRAIN”の組み合わせでは、[ø Ns]の他に[one's N]の形は可能なかどうか、などという点については不明である⁸。

『ジーニアス』の考察に戻ると、もう1点CHANGEの目的語の形について言及があるのは、語義5である。そこには“change [《米》 shift] gear(s)”と記されているが、目的語の形についての情報を求めている者にとっては見逃すことができない記述である。今、米語と英語の違いの問題はおいておくと、要は、「車のギアを換える (変速する)」、もしくは、比喩的に「話し方 [やり方] を変える」という意味では、目的語GEARの形は[ø N] (change gear) でも、[ø Ns] (change gears) でも、どちらも可能ということである。同じ意味で (もしくは、ニュアンスの違いはあるものの、ある1つの状況を記述する際に) 2つの異なる形が可能になるという点では、

上述のSEATやJOBと同様であるが、GEARの場合の2つの形の組み合わせが、SEATとJOBとは違っている点が大変興味深い。どちらも[\emptyset Ns]が可能である点では一致しているが、SEATとJOBでは他に[one's N]が可能であったのに対し、GEARの場合は、[\emptyset N]が可能、と解釈できる情報である。GEARを目的語にして「ギアを換える」「話し方〔やり方〕を変える」という意味で使う場合には、[\emptyset N]と[\emptyset Ns]の2つの形が使える、つまり、複数形語尾の-sがオプションになる（ただし無冠詞が共起する必要あり）、という情報は貴重である。

しかし、筆者の立場からすると、ここでも2つの問題がある。ひとつは、change gearとchange gearsでGEARの形の違いによる意味・ニュアンスの違いがあるのかないのかが不明であること。2点目は、[\emptyset N]と[\emptyset Ns]の両方の形が可能になるのは、目的語がGEARのときだけなのか、それとも他の名詞でも可能なのか、可能ならば、どのような名詞（群）なのか、について情報がなく、その結果、筆者は意図的にchange gearとchange gearsを使い分けることができず、また、GEAR以外にどのようなときに、複数形語尾-sがオプションになるのかが、わからない、という状況になる。

“CHANGE + GEAR”の組み合わせについて他の辞書を参照すると、辞書によって扱いがまちまちであることがわかる。『レクシス』では“CHANGE + GEAR”への言及はなく、『ウィズダム』では語義6として「<車のギア>を換える((米) shift)」という記述があるが、例文も補足説明もなく、したがってGEARが[\emptyset N]と[\emptyset Ns]の2つが可能になるという情報自体がない。Longman Advanced American Dictionary (LAAD)では語義14として、また、Macmillan English Dictionary (MED)ではイディオムのひとつとして“change gear/gears”と記述はしているが、[\emptyset gear]と[\emptyset gears]の意味・ニュアンスの違いについての説明はない。

GEARという名詞に限らず[\emptyset N]と[\emptyset Ns]の2つが可能になるケースについて、他の辞書を参照してみたが、筆者が見る限り新たな情報は見当たらなかった。しかし、Cambridge Advanced Learner's Dictionary (CALD)によると、さらに別な組み合わせで2つの形の可能性を示す情報がみられた。CALDはイディオムのひとつとして以下を載せている。

change (your) tack

to try a different method to deal with the same problem:

I've written twice and received no reply, so I might change tack and call her.

この情報によれば、目的語がTACKの場合には、[one's N]と[\emptyset N]の2つの形が可能と解釈できる。残念ながら、その場合、どのようなニュアンスの違いが生まれるのかの説明はない。さらに、筆者を困惑させるのは、MEDでも“change tack”をPhrasesのひとつとして挙げているが、そこでは[one's N]の可能性は示されておらず、辞書によって情報に微妙な違いがあることである。

以上、筆者が先行研究を参照した限り、CHANGEとその目的語の形の関係についての情報は一部の辞書に有益な情報が見出されたものの、それらは断片的なもので、しかも、ときには辞書

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

間で異なる情報が提供されている場合もあり、本稿の冒頭にとりあげたようなさまざまな制約の全体像やその理由についての情報は得られなかった。

以下では、CHANGEとその目的語の形の対応関係についての筆者の現時点での仮説を提示してみたい。

3. CHANGEの意味と目的語の形

3.1. CHANGEの3つのタイプ

前節ではCHANGEの意味と目的語の形の対応関係についてのいくつかの疑問を挙げ、両者の対応関係の全容が明らかにされていないことを指摘した。本節ではその対応関係についての仮説を提示する。

仮説の骨子は以下の通りである。

- 話者が主語(S)と目的語(O)の間にどのような関係を読み取るか(construe)によって、3つのCHANGEの意味が区別でき、かつ、目的語の形([\emptyset /a/the/one's N(s)])が決まる、もしくは、限定される。逆にいうと、目的語の形から、話者が意図するCHANGEの意味(主語と目的語の関係をどのように読み取ったか)がわかる、もしくは、かなり限定される。
- ある1つの状況における主語-目的語の関係の読み取り方(記述の仕方)は1つとは限らない。

主語(S)と目的語(O)の関係には3つのタイプ(I, II, III)があり、タイプごとのCHANGEの意味と目的語の形は表1のようになる。

表1 CHANGEの3タイプ

タイプ	主語(S)	目的語(O)	CHANGEの意味	目的語(O)の形
タイプI	影響を与える側 (Affector)	影響を受けて変わる側 (Affectee)	Sの影響によるOの変化	[the N(s)] [one's N(s)] [a N]
タイプII	属性を内在する側 (Bearer)	Sに内在する属性 (S's Intrinsic Property)	Sの属性の変化: Oがその属性を示す	[\emptyset N]
タイプIII	選択する側 (Choice-maker)	選択される側 (Choice Category)	Sの選択肢の変更: Oが選択肢カテゴリーを示す	[\emptyset Ns]

以下、タイプごとの説明する。

3.2. タイプI (Sの影響によるOの変化)

タイプIは、話者が主語(S)を「影響を与える側(Affector)」、目的語(O)を「Sの影響を受けて変わる側(Affectee)」と解釈した場合で、CHANGEの意味は「OがSの影響を受けることにより、‘CHANGE前のO_{before}’から‘CHANGE後のO_{after}’に変わる」となる。つまり、タイプIは「S

の影響によるOのCHANGE」ということになる。タイプ I の用例としては次のようなものが挙げられる。

[11] He **changed** the subject.

[12] He **changed** her mind.

[13] He **changed** a tire.

[14] He **changed** the rules.

[15] He **changed** his plans.

例えば、[11]を会話の最中に話題を変えたという意味で使う場合、主語の‘He’と目的語の‘the subject’はそれぞれ「影響を与える側」と「影響を受けて変わる側」と解釈され、彼が話題に影響を与えることにより、CHANGE前の話題からCHANGE後の話題に変わる、という状況表現しているということになる。同様に[12]-[15]では、目的語の「彼女の気持ち」「タイヤ1本」「規則」「彼の計画」が、それぞれの文の主語になんらかの影響を受けて、CHANGE前とは異なるものになった（もしくは、なる）状況表現している。

図1はタイプ I の主語と目的語の関係、ならびに、CHANGEの意味を図示したものである。左のボックスはCHANGE前の状況を、右のボックスはCHANGE後の状況をそれぞれ示したもので、円形のSは主語を、長方形のOは目的語を表す。SからOに伸びる矢印は影響力の行使を意味する。Oの色がCHANGE前とCHANGE後で異なっているのは、O_{before}からO_{after}へのOの変化を示す。例えば、図1のSに‘He’を、Oに‘the subject’をそれぞれ代入することにより、[11]についての上述の説明が可能になると考える。

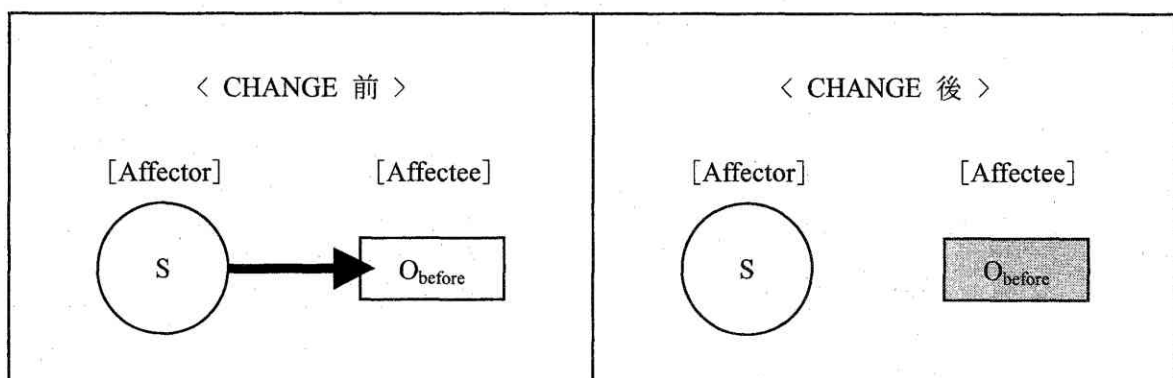


図1：タイプ I

[11]-[15]の用例からわかるように、タイプ I の目的語の形は、基本的に、[the N][one's N][a N][the Ns][one's Ns]の5つの形のどれかとなる⁹。これら5つの目的語の形の決定には以下の要因が関与していると思われる。

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

- 目的語の数（2つ以上と解釈されれば複数形語尾-sを使う）
- 目的語の指示性について話者と聞き手の間で共通理解が得られる度合い・補足説明の必要性（共通理解が得られる状況・補足説明が不必要な状況ならtheを使う）
- 目的語の所有者を明示する必要性（必要性が強ければone'sを使う）
- 目的語がある集合体の1構成員であること明示する必要性（その必要があればaを使う）

以下では、目的語の形ごとに説明を加える。

a) [the N]

[the N]は、「主語(S)の影響を受けて変わる側」の目的語(O)が1つであり、かつ、それが何を指しているのかについて、話者と聞き手の間に共通理解がある状況において用いられる。これは、Oの所有者を明示する必要性もなく（もしあれば[one's N]を使う）、Oがある集合体の1つの構成員(one member of a set)であることをことさら強調する必要性もない（もしあれば[a N]を使う）状況である。上記[11]のHe changed the subject.で[the N]が使われているのは、問題になっている話題の数が1つであり、かつ、その話題が何を指しているのかについて、話者と聞き手の間で共通理解がある状況（補足説明が不必要な状況）であるからである。

この形の[11]以外の例としては次のような文がある¹⁰。

- [16] How does the President plan to **change the tax system**? (LDCE)
- [17] They should **change the law** to make it illegal to own replica weapons. (COBUILD)
- [18] Information technology has **changed the way people work**. (OALD)
- [19] I'll be right back. I just have to **change the baby**. (LAAD)
- [20] Could you help me **change the bed**? (OALD)

b) [one's N]

[one's N]は、目的語(O)の数が1つであるときで、かつ、Oの所有者（誰のOか）を明示する必要性が強い状況において用いられる（所有者を明示する必要がなければ、[the N]か[a N]）。[12]のHe changed her mind.で、herが用いられているのは「彼女の」を明記しないと、だれのmindをchangeしたのかが不明になるためと考えられる¹²。

この形の他の例としては次のような文がある。

- [21] He **changed his room**.
- [22] She **changed her church**.
- [23] Marie **changed her name** when she got married. (OALD)
- [24] I'll just **change my shirt** and I'll be with you in a minute. (LDCE)
- [25] I want to **change my doctor**. (OALD)

- [26] We **change our car** every two years. (OALD)
 [27] I bathed him and **changed his diaper**. (LDCE)
 [28] He soon **changed his tune** when he saw how angry I was. (MED)

目的語の形が[one's N]の場合には、CHANGEの意味に曖昧性が生じることがある。[21]では、例えば、自分の部屋を#518から#632へ移動した場合と、同じ部屋(#518)に何らかの変化を及ぼした場合(例えば、模様替え)、の二通りの解釈が可能となる。同様に[22]では、今まで自分の教会として行っていたA教会に行くのをやめて、今度はB教会へ行くこととしたような意味にもとれるし、同じ教会(A教会)に何らかの変化を及ぼした意味(例えば組織改革)にも解釈でき、比較的容易に曖昧性が生じる¹³。もっとも、二通りの解釈とはいっても、どちらも「彼の部屋」や「彼女の教会」が彼もしくは彼女によって変えられたということを述べているという点においては同じことである。

ここで興味深い点は、[one's N]の代わりに[the N]を用いると、その曖昧性が消えてしまうことである。つまり、「He changed the room.” や “He changed the church.” という、模様替えや組織改革など、後者の解釈のみとなってしまう。

c) [a N]

CHANGEの目的語が[a N]となるのは、「影響を受けて変わる側」が1つであり、かつ、その1つがある集合体の1構成員(one member of a set)という認識を伝えたい場合であり、その集合体には、その1構成員以外にも構成員(the other members of the set)がいることを含意する。[13] He **changed a tire**.の例では、1台の車の場合、一般的には4輪なのでタイヤは4つで1セットをなすという前提にたち、その集合体(車についている4本のタイヤ)の1本のタイヤを替えたことを伝えていると考えられる。

タイヤを1本替えたときに、He **changed the tire**と言っても、He **changed his tire**.と言っても、また、He **changed a tire**.も言っても、どの表現も事実と反するわけではない。違いは、[the N]を使えば、1本のタイヤの交換という情報にプラスして、どのタイヤのことを指しているのか話者と聞き手の間に共通理解があること(もしくは、補足説明を必要としない状況であること)を伝えることができ、[one's N]を使えば、誰のタイヤかを明示できることになる。そして、聞き手が想起するのは、そのタイヤ1本だけで、残りの3本のタイヤが意識されることはない。しかし、[the N]も[one's N]も使わず、あえて、[a N]を使う場合には、どのタイヤかについて話者と聞き手に共通理解がない(もしくは、補足説明の必要性がある)ことと、タイヤの所有者の情報がない(もしくは、それをことさら話題にする重要性がない)ことを示しながら、その車のタイヤすべてを意識させた上で(つまり、その集合体には1つだけでなく他にも構成員がいる・あること

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

を意識させた上で) その中の1本のタイヤに言及することになると思われる。

他の例をみると以下のような文がある。

[29] He went off to **change a guitar string**. (COB3)

[30] She can't even **change a nappy**. (OALD)

[31] I paid £80 to have my car radio fixed and I bet all they did was **change a fuse**. (COBUILD)

[32] A writer spends many hours going over and over a scene --- **changing a phrase here, a word there**.(COB3)

[29]では、一般的なギターは6弦であり、そのうちの1弦が切れたかなにかの理由で、その1本だけを替えたという意味であり、change a guitar stringと[a N]を使うことにより、必然的にそのギターには、その1本の弦以外にも弦があることを意識させることになると思われる。[30]では、[a N]を使うことにより、おしめは一回替えればそれでおしまいというわけではなく、何時間おきかに替え続けなければならないという前提のようなものを描写していると考えられる。

なにをもって1つの集合体と見做すかという点について若干補足すると、集合体の具体的な数については、決して固定的な1つの解釈が存在するというわけではなく、状況に応じてさまざまな解釈が可能となる。1台の車や1本のギターが話題のときには、1つの集合体の構成員の数について、4本や6本というように比較的共通理解が得やすい場合もあるが、そうではない場合(不特定多数や無限大)もある。車のタイヤの例で続けると、All drivers should really know how to change a flat tire. においては、ある1台の車が問題になっているわけではなく、パンクしているタイヤならどれでもその構成員になれる集合体が問題にされていると考えられる。このように無限大の数を含む集合体の場合には、総称的な解釈の可能性がでてくると考えられる。また、[30]のように、否定文の場合では、不特定多数もしくは無限大の数のおしめが1つの集合体を構成していて、その中の任意の1つのおしめが話題になっているのであり、彼女はどんなおしめであれ、おしめの1つも替えられない、という強い否定の意味が生まれてくるのではないかと、考える。

d) [the Ns]

[the Ns]は上述の[the N]の複数版である。つまり、[the N]と同様、「影響を受けて変わる側」について話者と聞き手の間に共通理解がある(もしくは、補足説明の必要がない)が、違いは「影響を受けて変わる側」が1つではなく複数であるという点である。従って、話者と聞き手の間で了解可能な何らかのまとまりをもった集合体の構成員全員を指すときに使われる。[14] He **changed the rules**.では、話者と聞き手の間で共通理解のある、ある規則群全体に言及して、彼がその規則群に影響を与えて変えた、という意味である。

他の例としては以下のような文が挙げられる。

[33] When was the last time you **changed the batteries** in your smoke detectors? (LAT98)

[34] I **changed the sheets** on your bed today. (COBUILD)

[33]では、煙探知機の中に入っている複数の電池という共通理解が、また、[34]ではベッドメイキングに使う普通2枚のシーツという共通理解が、それぞれ話者と聞き手にあるということが、[the Ns]を用いることによって、伝えられる。

e) [one's Ns]

[one's Ns]は上述[one's N]の複数版である。つまり、「影響を受けて変わる側」の数が複数で、それらの所有者（誰のか）を明示する必要性が強い状況において用いられる。[15] He **changed his plans**.では、誰の計画を変えたのかを明記する必要があるから[one's Ns]である。

他の例としては次のような文がある。

[35] What tragedies must occur before he and the Minister of State will **change their minds**? (LDCE)

[36] **Changing your eating habits** is the best way to lose weight. (LDCE)

[37] People have **changed their diets** a lot over the past few years. (CALD)

以上、CHANGEのタイプIに分類される5つの目的語の形を見てきたが、共通していることは、主語と目的との関係が、「影響を与える側」と「影響を受けて変わる側」という関係にあり、主語が目的語になんらかの影響を与え、その結果、目的語そのものが変わる、という点である。タイプIでは、「影響を受けて変わる側」が(1)いくつなのか、(2)もし、1つだとしたらそれはある集合体に属する他の構成員をも視野に入れたものか否か、そしてときには(3)誰のものなのか、という情報が関与的となり、話者は、この情報(これらの要因についての判断)を目的語の形を通して聞き手に伝えている、と考えられる。非複数形の[the N], [one's N], [a N]はどれも「影響を受けて変わった側」が1つであることを示すが、その1つのものが、ある集合体の1つの構成員(one member of a set)と見做される場合には、[a N]が、そうでなければ、あとは所有者を明示する必要度にあわせて[one's N]か[the N]のどちらかになる。もし、「影響を受けて変わった側」が複数であれば、当然複数形で表わすことになり[the Ns]か[one's Ns]になる。

3.3. タイプII (Sの属性の変化: Oがその属性を示す)

タイプIIでは、主語(S)は、「(目的語で示されている)属性を内在する側(Bearer)」であり、目的語(O)は「主語に内在する属性(Subject's Intrinsic Property)」を示している。目的語で表わされる「主語に内在する属性」とは、主語を規定する上で必要不可欠な特徴・性質であり、かつ、主語に必然的に含まれるものを指す。その属性は、変ることがあっても、そのときそのときでは

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

絶えず一つの価値しかもてず、同時に複数の価値をもつことはない。

タイプⅡは「Sに内在する属性Oが‘CHANGE前のO_{before}’から‘CHANGE後のO_{after}’に変わる」ことを意味する。しかし、Sの属性が変わるということは、S自体の変化を必然的に意味するわけで、「Sが（その属性Oにおいて）変化する」ととらえることもできる。

タイプⅡの用例としては次のようなものが挙げられる。

[38] The leaves **changed** ∅ color.

[39] The winds **changed** ∅ direction.

[40] The ship **changed** ∅ course.

[41] He decided to **change** ∅ sex.

[42] He suddenly **changed tack** and lowered his asking price. (MED)

[43] 'If a patient can not **change position** at will, the nurse becomes responsible for doing it for him.
(BNC)

[44] The conference **changed** ∅ venue.

[45] The poem **changes** ∅ tone in the second stanza.

[38]ではOの「色」はSの「葉」を規定する上で重要な属性のひとつであり、「色」は「葉」に内在している属性であるという認識に基づき、その属性・色が‘CHANGE前の色’から‘CHANGE後の色’に変わる、という状況を記述している。[39]では、Sの「風」とOの「向き」がそれぞれ「属性が内在する側」と「主語に内在する属性」という関係に解釈されて、その属性・向きが変わる、という表現ととらえることができる。[40]-[45]の例においても、「船」にとっての「コース」、「人間（彼）」にとっての「男女の性」や「方針(tack)」、「患者」にとっての「(寝ている)体勢」、「集会」にとっての「開催場所」、「詩」にとって「音調」、というように、目的語で示されているものは、主語の重要な属性と見なすことができる。

タイプⅡの目的語の形は、上の例からわかるように[∅N] 1つだけである。

図2はタイプⅡを図示したものである。

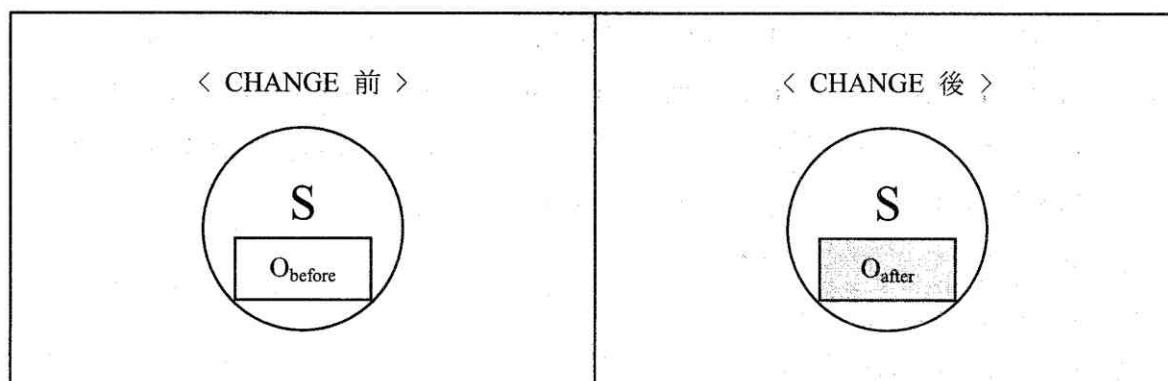


図2：タイプII

タイプII (図2) は先に示したタイプI (図1) とは2つの点で大きく異なっている。

1点目は、SとOの位置関係である。タイプIではOはSの外に位置し、SとOが別々の個体であることを示唆していたが、タイプIIではOはSの中に位置していて、OがSに内在するものであることを示唆している。

2点目は、影響の行使を示す矢印の有無である。タイプIと異なり、タイプIIでは矢印が無い。このことは、変化がSがOに影響を与えた結果生じるものという見方をしていないことを示唆している。(「葉」が、自分の「色」に、影響を与えて、紅葉するというわけではない。)

つまり、タイプIではSの方は専ら影響を与える側で、変化はしていなかった。変化したのはOの方のみである。一方、タイプIIでは、片方が片方に影響を与えるという関係にはなく、片方(O)が片方(S)に内在しているという包括関係にあり、従って、片方(O)が変わるということは、それを内在するもう一方(S)も必然的に変るといふ、関係である。

なお、図2には、長方形で示されたOは一つしか示されていないが、もちろんSにはO以外の属性が他にないということを示唆しているわけではない。ただ、話者の中でO以外の属性は意識されないというだけである。例えば、「葉」には、「色」という属性の他に、「形」という属性もあれば、「大きさ」という属性もある。しかし、“The leaves changed color.”という文を発する時点での話者の意識下には、「色」という属性しか存在しない。

以上のような特徴を考えると、なぜ、タイプII CHANGEの目的語の形が[ø N]になるのかという点も自ずと見えてくるように筆者には思われる。つまり、タイプIIの文で話題にさせる属性は、いつも目的語で示される属性1種類だけである。確かに、その1種類の属性はさらにその属性を構成する複数の構成員からなるとも考えられるが、“How many colors did the leaves change?”というような問いが意味をなさないことからわかるように、そのような複数の構成員を問題にしているわけではないことは明らかである。タイプII CHANGEで話者が伝えようとしている最も重要な情報は、「どの側面(属性)」において、主語が変わったのかという点であり、その属性名が示されればそれでいいわけである。いつも1種類の属性しか問題にされないことから、まず、

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

複数形語尾-sの使用は不適切となる。また、その属性を含むある集合体が意識される、されないに関わらず、1つの構成員を指しているわけではないので、[the N]も[a N]も不適切となり、最後に、誰の属性かについては、いつも主語の属性であるので、あえて言語化する必要はなく、one'sで誰の属性かを明記しなくてもよい。その結果、[\emptyset N]が最有力候補となる。

なお、タイプIIで用いられる目的語の種類は、他のタイプと違って、非常に限られている。しかし、これはタイプIIの目的語が、「主語に内在する属性名」であるという特徴を考えると、なにかの属性を表わす名詞に限られるわけで、種類が限定的になるのも当然である。上で挙げた名詞も含めて、タイプIIの目的語として用いられる名詞としては、次のような名詞群が挙げられる。

タイプIIの目的語：

COLOR, SHAPE, FORM, POSITION, SEX, DIRECTION, COURSE, SPEED, GEAR, TACK,
TONE, MEANING, VENUE, COUNTENACE, etc.

タイプIIについて、最後に、なにが属性になれて、なにがなれないか、という点について触れる。図2を見る限り、Oの部分には、いろいろなものが代入可能なようと思われる。(図2は、「Sにある属性が内在している」という事態と、「Sがあるものを所有・保持している」という事態を明確に区別できていない、という問題がある。)例えば、NAMEはどうか。名前は、一見、その名前の所有者の重要な属性のように見える。しかし、*He changed \emptyset name. は不可であることからして、筆者としては、NAMEは本稿でいう属性とは考えない。顔色、性別、姿勢、などが、人の属性になれて、名前がなれないのは、なぜか。それは、上で述べたように、ある1つの属性は、同時に一つの価値しかもてないという制約があることが関与しているのではないかと考える。つまり、名前は、本名、芸名、ニックネーム、ペンネームなど、持とうと思えば、同時に複数もつことが可能になる。しかし、同時に複数の顔色や性別、姿勢を持つことはない。

3.4. タイプIII (Sの選択肢の変更：Oが選択肢カテゴリーを示す)

タイプIIIは主語(S)が「選択する側」、目的語(O)が「主語によって選択される側」と解釈されるケースである。そしてタイプIIIのCHANGEの意味は「Sの選択肢の変更」となる。つまり、Sが、それまで選択していたもの(「乗っていた」「使っていた」など、何らかの関係をもっていたもの)との関連を断ち、Sがアクセス可能な「選択肢カテゴリー」の中の別のものを新たに選択する(関係をもつ)、という変化である。

タイプIIIの用例としては次のようなものが挙げられる。

[46] He changed \emptyset planes.

[47] He changed \emptyset jobs.

- [48] He **changed** \emptyset rooms.
 [49] He **changed** \emptyset hairdressers.
 [50] He **changed** \emptyset pitchers.
 [51] He **changed** \emptyset detergents.
 [52] He **changed** \emptyset shirts.
 [53] He **changed** \emptyset cassettes.

[46]ではSの「彼」は、今まで乗ってきた飛行機を降り、別の飛行機に乗る、という行為で、「飛行機」という選択枝のCHANGEをしている、と考える。[47]以下も同様に、目的語で明示されているさまざまな選択枝（「仕事」「部屋」「美容院」「ピッチャー」「洗剤」「シャツ」「カセット」）において、それまで選んでいたものとの関係を断ち切り（利用をやめて）、別のものと新たに関係を持つ、という変化を表現している。

タイプⅢは、話者が主語の動きをどう捉えるかによって、2種類に分けられる。つまり、選択枝(O)の変更のために、Sが移動するとみるか([46]-[49])、それとも、Sは動かず、選択枝(O)の方を移動させるとみるか([50]-[53])である。前者の見方をタイプⅢa、後者の見方をタイプⅢbと呼ぶと、その違いはそれぞれ図3、図4のように示すことができる。

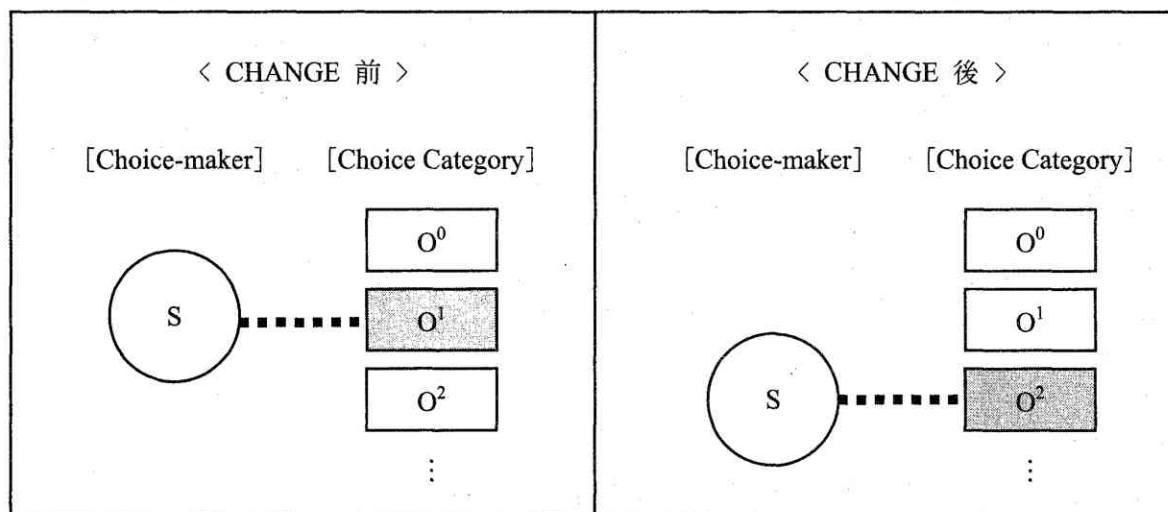


図3：タイプⅢa

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

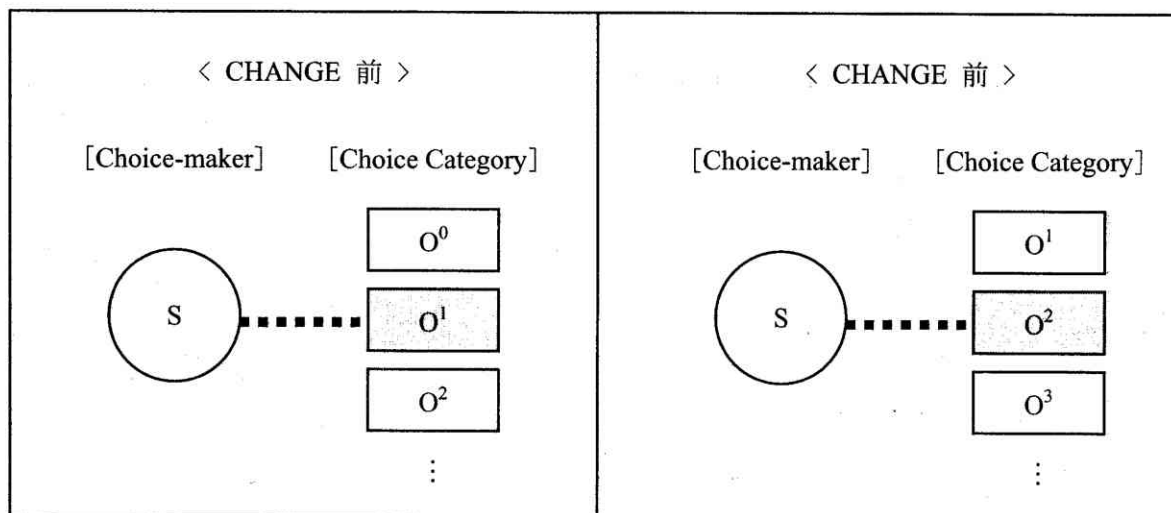


図4：タイプⅢb

図3のタイプⅢaでも、図4のタイプⅢbでも、Sの選択枝変更(O₁からO₂へ)という構図は変わらない。違いは、Sが移動する(と捉える)か否かだけである。タイプⅢaに分類される[46]-[49]では、「飛行機O₁」から「飛行機O₂」へ「彼」が移動して、乗り換えが行われるし、「職場O₁」から「職場O₂」へ「彼」が移動して、転職が行われる、というように考えることができる。一方、タイプⅢbに分類される[50]では、Sの「彼(監督)」はピッチャーを交替するために、「ピッチャーO₁」から「ピッチャーO₂」へ移動する必要はない。ピッチャー交替に伴い、マウンドを降りたり、マウンドに向かうという移動を行うのは、選択枝側の「ピッチャーO₁」と「ピッチャーO₂」の方である。他の選択枝「洗剤」「シャツ」「カセット」についても同様のことが言える¹⁴。

タイプⅢの目的語の形は用例からわかるように、すべて、[∅ Ns]となる。選択枝の変更のためには、普通、少なくとも2つの選択枝の同時存在が前提となる。タイプⅠおよびⅡにおいても、CHANGE前のO_{before}とCHANGE後のO_{after}の存在が前提となるが、タイプⅢとは異なり、同時存在ではないことに注意が必要である。タイプⅠ、Ⅱでは、CHANGEが起きた時点を境にO_{before}は消滅しなければならないし、CHANGEが起きた時点より以前にO_{after}が存在していることもあり得ない。この2つの選択枝の同時存在が複数形を要求するという点はよいとして、筆者がかつて抱いていた疑問、つまり、Taro **change** ∅ trains at Nagoya. において、なぜ、彼が乗っていた汽車の乗り換えでも、*He **changed** his trains at Nagoya.と[one's Ns]が不適切なのか、さらには、仮に話者も聞き手も、「太郎」がどの電車からどの電車に乗り換えたのが了解済みの場合であったとしても、なぜ[the Ns]を使えないのか(*Taro **change** the trains at Nagoya)、はどう説明すべきか。筆者の今の時点の説明は、目的語の形を[one's Ns]もしくは、[the Ns]にしてしまうと、タイプⅢの「Sの選択枝変更」の意味ではなくなり、タイプⅠの「Sの影響によるOの変化」に解釈されるためなのではないか、である。

4. まとめ

本稿は他動詞CHANGEの意味と目的語の形の対応関係を分析し、話者が主語と目的語の間どのような関係を読み取るかによって、3つのタイプのCHANGE（タイプⅠ, Ⅱ, Ⅲ）に分類でき、そのタイプごとに、特定の目的語の形が対応している、との仮説を提示した。

もし本稿で提示した仮説が正しければ、CHANGEの目的語はそれぞれの形ごとに、次のような役割分担がなされていることになる。

- 目的語が[ø N]なら、「Sのある属性」を示し、文全体の関心は「Sがどの属性において変わったのか?」となる。(→タイプⅡ)
- 目的語が[ø Ns]なら、「Sの選択肢カテゴリー」を示し、文全体の関心は「Sが何の選択肢の変更を行ったか?」となる。(→タイプⅢ)
- 目的語がそれ以外の形([the N(s)][one's N(s)][a N])なら、「Sに影響を受けて変わる側」を示し、文全体の関心は（主語が何に影響を与えて変えたのか?）となる。(→タイプⅠ)

今後の研究課題としては以下が挙げられる。

まず、本稿で提示した仮説の注意深い検証が急務である。本稿の考察は数名のネイティブインフォーマントの断片的な判断データを基にして筆者が行ったもので、特に形の違いによるニュアンスの違いについての体系的なデータが必要である。

次に、本稿では英語の分析に専念し、日本語の「変える」「替える」「代える」「換える」の漢字の使い分けについては触れなかった。それぞれの漢字と、本稿で提示した3つのタイプのCHANGE、ならびに、目的語の形、との対応関係についての詳細な分析が必要である。

他動詞CHANGEの意味とその目的語の形の対応関係

参考文献

- Declark, R. (1991). *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo : Kaitakusha,
 Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. London:
 Longman

辞書

- Rundell, M. (Ed.) (2002). *Macmillan English Dictionary*. London: Macmillan Education. [MED]
 Sinclair, J. (ed.) (2003) *Collins Cobuild Advanced Learner's English dictionary*. 4th edition. Harper Collins.
 [COBUILD]
 Summers, D. (ed.) (2002). *Longman Advanced American Dictionary with CD-ROM*. Harlow: Longman. [LAAD]
 Summers, D. (ed.) (2000). *Longman Dictionary of Contemporary English*. 3rd edition. Harlow: Longman. [LDCE]
 Wehmeier, S. (ed.) (2002) *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 6th edition. Oxford University Press. [OALD]
 (2003). *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. Cambridge University Press. [CALD]

- 井上永幸・赤野一郎 編『ウィズダム英和辞典』(2003) 三省堂
 小西友七・南出康世 編『ジーニアス英和辞典第3版』(2001) 大修館書店
 花本金吾・野村恵造・林龍次郎 編『レクシス英和辞典』(2003) 旺文社

コーパス

- The British National Corpus [BNC]
 The Los Angeles Times 1998, Dialog OnDisc [LAT]

注

- ¹ 判断は数名のネイティブスピーカーの回答に基づく。
- ² この《◆O1は複数名詞》という注意書きは、語義2で導入されている2つの構文のうちの2つめの構文についての注釈なのか、それとも、両方の構文についての注釈なのか、あいまいだが、用例と照らし合わせると、2つめの[SVO1 (with O2)]への言及と解釈するのが妥当に思われる。
- ³ しかし、複数形でなくてはいけないとはいっても、複数語尾-sさえついていれば、[∅ Ns], [the Ns], [one's Ns]のどれでも可能なのかという点については、明らかにされていない。確かに用例 *change planes* ではone'sもtheも使用されていないので、[∅ Ns]でなければならないと解釈するのが一般的であるのかもしれないが、そうなると、*change planes*のすぐ上の用例の～ *one's books*では、[one's Ns]が用いられているので、代名詞所有格つきの場合でも複数形が可能という情報を提供していることになり、少なくとも多少の混乱が予想される。
- ⁴ *change seats*が「席を交換する」なら、*change planes*は「飛行機を交換する」となって、「乗り換える」の意味からは異なったものになるのではないか。*change one's seat*が「別の席に座る」というのならば、「別の飛行機に乗る」という意味で*change one's plane*も可能になりそうだが。
- ⁵ 「…替える」だけでなく、漢字違いの「変える」もこの語義に入れられているという違いはある。
- ⁶ 興味深いことに、『レクシス』でも「タイヤを取り替える」という訳がついた例文として“*change a tire*”が載っているが、『レクシス』の場合、語義2ではなく、語義3の「…を<…>取り替える (exchange) <for>」に区分されている。

⁷ 因みに、筆者が数人の米語話者のインフォーマントにSwanのこの指摘について意見を求めたところ、人により判断にばらつきが見られた。例えば、あるインフォーマントからは次のようなコメントが寄せられた。I am not willing to say categorically that "change shirts" is unnatural. I do not think I would say it, but I would probably NOT think it strange if I heard someone else use it. I would assume the person meant "put on a different shirt". On the other hand, "change cassettes" seems less natural, but still perfectly understandable. If I heard it, I might wonder at the use, but I do not think I would immediately assume it was an incorrect usage.

また、別のインフォーマントは "I do not think that "change shirts" and "change cassettes" are inappropriate uses of change + plural." と述べた上で、以下のような文を提供してくれた。

- 1) We have got the wrong cassette here. We've got to change cassettes.
- 2) When you get to the end of lesson 2 you have to change cassettes.
- 3) Changing cassettes is easy. All you have to do is push the button, remove one and insert the other.

⁸ 筆者の理解では、「乗り換え」の意味では、change one's trainは不適格である。

⁹ ここで、基本的にとことわりを入れたのは、この5つの形以外の形、つまり、[\emptyset N]と[\emptyset Ns]もタイプIの目的語として使用の可能性は完全に否定できないからである。筆者がその候補かもしれないと考える例としては、以下のような用例がある。

[\emptyset N]: We can not **change society** in one week.

[\emptyset Ns]: So do women try to **change men** more than men want to change women? (BNC)

しかし、現時点では[\emptyset N][\emptyset Ns]のどちらも用例は非常に限定的のように思われるので、本稿では、例外的な扱いとすることにした。

¹⁰ [16]のthe baby や[17]のthe bedはそれぞれ「赤ん坊のおしめ」や「ベッドのシーツ」を指すと理解するのが一般的である。このメトニミー用法は英語では十分可能（もしくは、むしろ一般的）だが、日本語ではかなり無理がある。つまり、「赤ん坊をかえた」や「ベッドをかえた」という日本語からは、一郎ちゃんと太郎ちゃんをかえた、このベッドとあのベッドをかえた、のような状況が連想され、「そのひとりの赤ん坊のおしめを替えた」や「その1台のベッドのシーツを替えた」の意味には解釈されない。したがって、問題の英文の日本語訳では「おしめ」や「シーツ」などを言語化しなければならない。

¹² 実は、one'sの使用については、所有者を明示する必要性という要因だけでは説明しきれない場合があるように筆者には思われる。その背景には、英語と日本語で "one's + N" と "だれだの・なににないの + N" の表現が必ずしも対応しない可能性、さらには、英語の個々の名詞によって、one'sを要求する度合いが異なる可能性、などが考えられる。例えば、MINDという名詞は、ほとんど義務的と言っていいほどone'sを要求しているように思われる。今後の重要な研究課題である。

¹³ 以下は[one's N]が使用されていることにより曖昧性が生じたため、話者が話の途中で、その曖昧さを除くために言い換えを行っている例ではないかと思われる。

Mike: ... It seems to me that when people have to stay in their old houses, a lot will console themselves by buying new furnishings.

Jim: That's what people do when they're stuck in their houses?

Mike: Exactly. If they can't **change their house**, **if they can't relocate**, they gussy up what they do have. (LAT98)

¹⁴ タイプIIIbの「シャツ」「カセット」は上述のSwan(1994)が問題提起で使用していた例であるが、筆者が数名のネイティブインフォーマントに聞いた限り、changing shirts も changing cassettes も可能であるとの回答であった。したがって、現時点で筆者は、IIIbのタイプについては抵抗を感じるネイティブスピーカーもいる、という理解でいる。